

# 文系大学での海外インターンシップの 意義・効果についての考察

——文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学の事例——

千葉 隆 一\*

【要旨】 文部科学省は2011年度から大学や短大に職業指導（キャリアガイダンス）を義務付ける。職業指導で中核となる取り組みがインターンシップである。厳しい雇用情勢の中、学生の危機感も高まっており、インターンシップへの関心と参加者が年々増加しているのに対応して多くの大学が多様なインターンシップを実施している。学生はインターンシップを通じて「自分の職業適性や社会に出てからの仕事、仕事に必要な知識やその後の学生生活の過ごし方」などを考える機会となり、その教育効果が大変高いことが確認されている。しかし、その殆んどは国内で実施しているインターンシップであり、大学自らが海外の受入れ先を開拓して教育目的で実施している海外インターンシップ<sup>1)</sup>の事例は極めて少ない。本学は今年度、海外インターンシップとして4ヶ国・1地域に43名の学生を派遣した。参加した多くの学生から、「英語でコミュニケーションをとる楽しさを実感、もっと語学力を伸ばしたい」との声が聞かれた。海外インターンシップに参加した学生へのアンケートやTOEICスコアの分析の結果、就業意識への影響や自己効力感ばかりでなく、語学力の向上、視野の拡大や異文化の受容性の向上という観点でも海外インターンシップの意義・効果が顕著であることが確認された。以上に鑑み、文系大学において海外インターンシップが国際社会で通用するコミュニケーション能力を身に付ける優れた教育プログラムであるとの結論に至った。少子化傾向と経済のグローバル化が進行する中、国際的に活躍する人材の育成がわが国にとって急務となっている現在、海外インターンシップは日本の将来を担う人材の育成として大きな役割が期待される。

## はじめに

近年、ニート、フリーター、そして若年失業者の増加が社会問題となっているが、リーマンショック後の新卒採用の抑制などにより若年者の雇用問題がさらに深刻化している。このよう

---

\*教授／教育社会学

な状況から、大学や短大でのキャリア教育充実が益々重要となっており、その中核的な取り組みとしてインターンシップが急速な拡がりをみせている。文部科学省が教育改革プログラム(1997年)でインターンシップを「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義して、経済産業省、厚生労働省と連携して積極的な推進を図るなど急速な普及に果たした役割は大きい。大学が企業と連携して、学生が在学中に就業体験を通じて職業観や就業観を育み、真剣に自身の将来を考える機会を提供することの意義は極めて大きい。現在、多くの大学が多様なインターンシップを実施しており、その取り組み自体が第三者の認証評価機関などによる評価対象にもなりつつある。インターンシップが学生の就業意識に及ぼす影響やインターンシップと自己効力感との関連など様々な研究が行われているが、その殆んどが国内で実施されているインターンシップを対象にしたものであり、海外で実施されているインターンシップについてはまだ研究は少ない。

近年、緩やかな人口減少と経済のグローバル化が進む中、わが国の企業は海外に進出しなければ今後の成長は見込めない。わが国の企業にとって人材の国際化は重要な課題であり、国際的に活躍する人材の育成は大学にとっても大きな課題となっている。

本稿では、特に海外インターンシップに着目して、学生へのアンケートやTOEICスコアなどを分析し、その意義・効果を整理するとともに、今後の海外インターンシップ推進に向けての課題を探りたい。

## 1. わが国におけるインターンシップ普及の背景

大学への進学率が52%を超えて全入時代を迎え、多様な入試形態の導入により学力や学習意欲が十分でない学生が増えている。このような状況において、多くの大学は学士課程教育の充実を図るため、初年次教育やインターンシップを導入するなど教育方法を改善して学生への教育効果を高める様々な取り組みを行っている。インターンシップ制度は米国シンシナティ大学が1906年に始めたとされている。わが国では当時の文部省(現文部科学省)が「教育改革プログラム」(1997年)で「学習意欲の喚起、主体的な職業選択の能力や高い職業意識の育成などの観点で大きな意義を有している」として総合的な推進を図ってきた。

インターンシップへの関心が高まった背景としては、大学を卒業して3年以内の離職率が3割を超えるなど雇用のミスマッチや就職協定の廃止などが挙げられる。日経連<sup>2)</sup>は「次代の人づくりに向けたインターンシップ教育」(2001)において、「教養教育のほか、職業に就くために必要な基礎能力を養う教育やキャリア形成力を培う教育を行うことが一段と重要性を増してきている、在学中に産業界のニーズに応える職業観・就業意識の高い人材育成の一環として、インターンシップを始めとした産学協同教育を積極的に推進する必要性」を提言している。このように、将来の職業に結びつく教育が重要視されるようになり、インターンシップが注目を集めるようになった。

文部科学省の平成 19 年度調査によると、4 年生大学では 504 校（67.6%）、短大は 170 校（43.6%）がインターンシップを実施し、大学や短大を合わせ 54,694 人の学生がインターンシップを体験している。このほか、企業が募集したり、学生が独自に開拓して単位に認定されないインターンシップなどを含めれば、文部科学省が発表した学生数を大幅に上回るものと推測される。これらの殆んどが国内で実施されているインターンシップであり、大学が受入れ先を開拓して実施する教育目的での海外インターンシップの事例はまだ極めて少なく、その数は把握されていない。大学が独自に受入れ先を開拓して実施している海外インターンシップの殆んどは企業出身教員の個人的なチャンネルに負っているのが実態である。また、留学などを斡旋する業者などがワーキングホリデー制度を利用したアルバイトに類する労働力提供を海外インターンシップという用語を使っており、吉本（2006）は、これを「海外インターンシップの広がり」として論じている。このような滞在費を稼ぐための就労と教育目的で実施される海外インターンシップとは内容が相違しており、海外インターンシップの定義を確認する必要がある。

## 2. 本学の海外インターンシップの概要

### 2-1 実績と特徴

外国語学部と短大が国内インターンシップを始めたのは 2003 年であり、海外インターンシップは 2 年後の 2005 年に始め、6 年目の今年迄に 151 名の学生が参加している。（図 1）

2009 年からグアムにおいて現地の大学との提携による英語の授業が組み込まれたインターンシップを実施するなど、語学面の不安を解消したり、現地の文化を学ぶ機会を設けるなど内容の充実を図っている。インターンシップの期間は派遣国の査証問題や受入れ企業の事情により異なるが概ね 2 週間～5 週間となっている。受入れ企業及び研修内容は学生の進路希望に鑑み、ホテルや航空会社などでの OJT<sup>3)</sup> である。学生にとって異文化を学び、国際社会で通用するコミュニケーション能力などを身に付けられる海外インターンシップは魅力的であり、参加希望者は年々増加している。

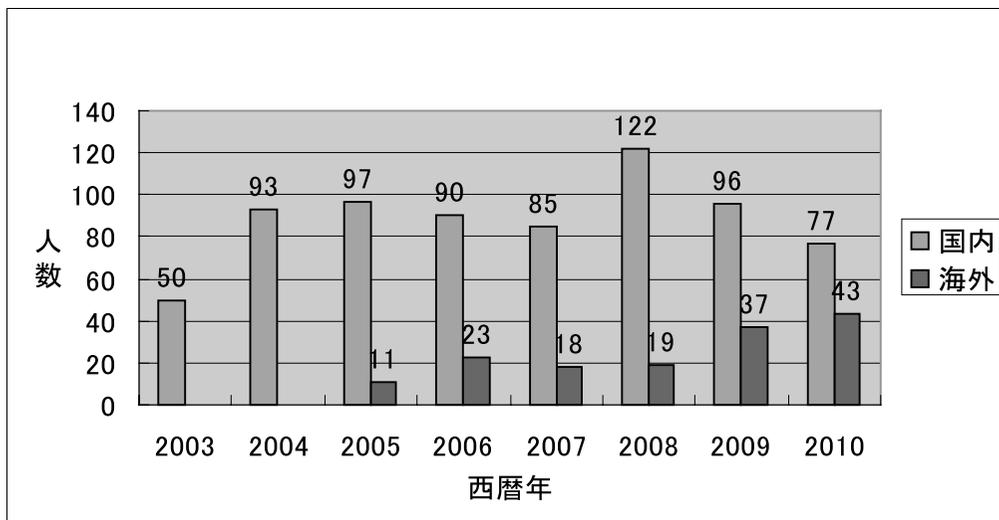


図-1 年度別インターンシップ参加者数の推移

※ 2010年夏期海外インターンシップ派遣国・地域（都市）と派遣学生数

- ・英語圏 英国（ロンドン）、グアム、パラオ 33名
- ・中国語圏 中国（北京・大連）、台湾（台北・高雄） 10名 合計43名

※ その他の派遣国（2005～2009） オランダ、カナダ、オーストラリア、シンガポール

本学の海外インターンシップの特徴は、

- ①受入れ企業を旅行会社や仲介団体を通さず、安全性及び研修内容などを確認して本学が独自に開拓し、教員が研修期間中に研修先を巡回する
- ②現地滞在費（宿泊代、食事代）などを受入れ企業に一部負担していただいている
- ③所定の語学資格を取得すると大学が奨励金を支給する

ので、学生は比較的少ない費用負担で安心して海外インターンシップに参加できることである。

## 2-2 理念と目的

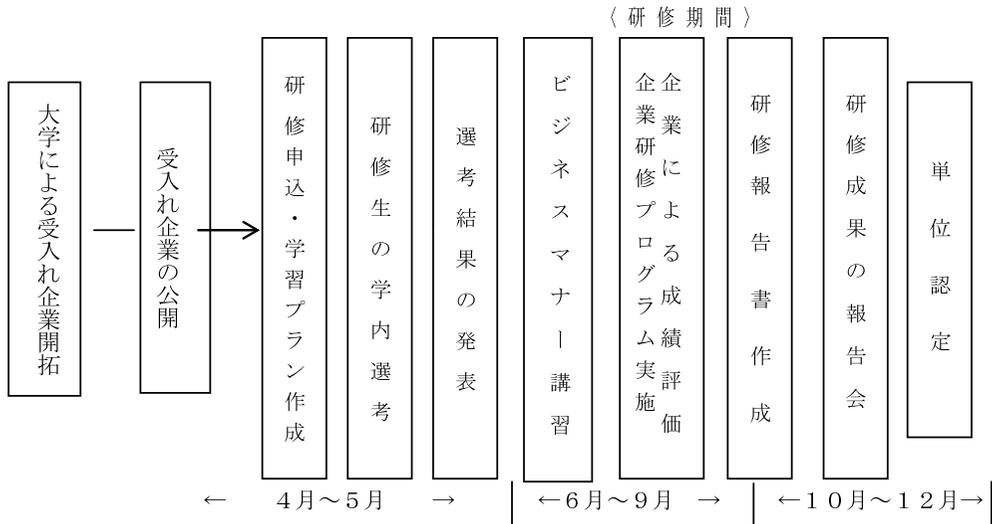
本学は、自立と共生の人間教育を基本理念として、理論と実践の両面から学生の就業意識、判断力、創造力、行動力を養い、そして社会で役立つ人材を育成することを目的にインターンシップを実施している。

## 2-3 単位認定と奨励金の支給

インターンシップの対象は、外国語学部は2～3年生、短期大学は1年生以上となっており、2週間以上の研修修了者には正規科目として2単位を与え、インターンシップ期間中に組み込まれた30時間の語学授業の修了者には、さらに2単位を与えている。海外インターンシップでは所定の語学資格を取得した学生に奨励金（5万円～10万円）を支給している。

## 2-4 インターンシップ科目履修の流れ

海外インターンシップは査証の取得など渡航手続きを必要とすることから、4月に募集を開始して概ね5月中に参加者を選抜し、夏期休暇である8～9月に研修を実施している。（図2）



図－2 インターンシップ科目履修の流れ

## 3. 意義・効果測定

### 3-1. 調査方法 [アンケート]

2010年夏期インターンシップに参加した外国語学部や短期大学の学生を対象に研修前と研修後に質問紙により実施した。

研修前の質問項目は、インターンシップへの参加目的、ビジネスマナー接客の基本5項目（身だしなみ、態度、言葉遣い、会話力、挨拶）で構成されている。

研修後の質問項目は、感想（満足度、アルバイトとの比較を含む）、希望するインターンシップ期間、新たな学習目標ができたか、進路選択に影響すると思うか、参加目的の達成度、達成の為にどのような努力・工夫をしたか、インターンシップで勉強したこと、遣り甲斐を感じたり、感動したこと、困ったこと、改善が必要と思うこと、大学選択においてインターンシップを考慮したか、インターンシップに参加したいと思った時期、ビジネスマナー接客の基本5項目（身だしなみ、態度、言葉遣い、会話力、挨拶）などで構成される。接客の基本は、身だしなみ、態度、言葉遣い、会話力、挨拶の5項目に分類して、各項目についての行動レベルをa（よく出来る）・b（ふつう）・c（出来ていない）の3段階で提示し、自分の行動がどのレベルかを参加前と参加後に自己採点させた。

3-1. 分析結果 [アンケート]

(1) インターンシップに参加する目的は何ですか。

表1 海外インターンシップ参加者 (42名)

	複数回答
○語学力 (英語、中国語) を向上させたい	61.9%
○就業体験 (海外で働いてみたいを含む)	59.5%
○サービス・ホスピタリティを学びたい	31.0%
○視野を広げ (異文化)、成長したい	21.4%
○ビジネスマナー、コミュニケーション力を習得したい	19.0%

表1は、海外インターンシップに参加する目的についてのアンケート結果を示している。国内インターンシップに参加する学生の目的は、就職活動に備えての就業体験、業界研究、自分探し、視野を広げ自分を成長させたい、ホスピタリティ・サービスを学びたい、社会人としてのビジネスマナー、コミュニケーション力を習得したいなどであった。海外インターンシップでは参加目的として一番多かったのが「語学力を向上させたい」であることが国内インターンシップの参加者と違うところであるが、これは調査対象が外国語 (英語) を専攻している学生であるということも関係していると考えられる。次いで、就業体験だが、特に海外で働いてみたいという気持ちを持っている学生が多数おり、異文化体験、異文化理解に対する関心が高いことが分かる。

(2) 今回参加したインターンシップに対する感想は如何ですか。

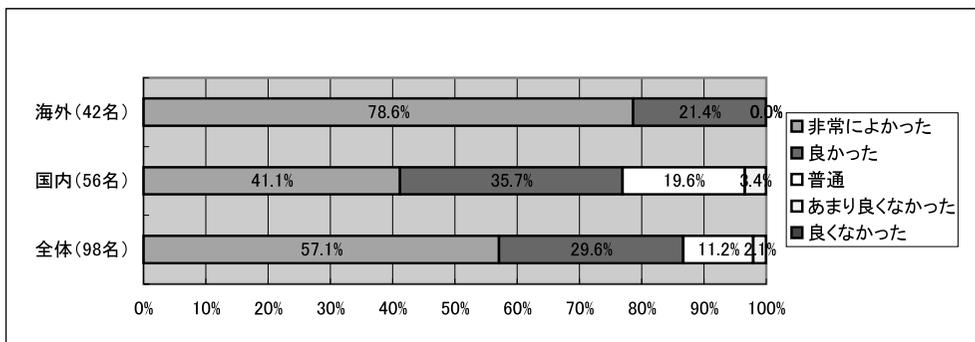
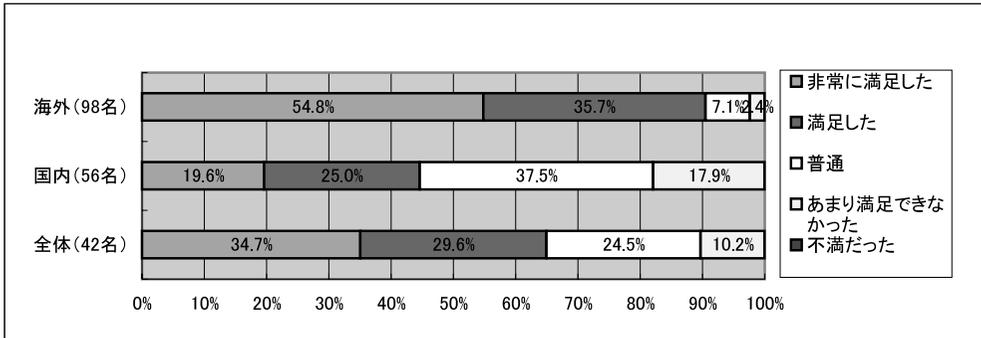


図-3 インターンシップに関する感想

図3は、インターンシップの満足度を示している。全体では、非常に良かったと良かったを合わせると86.7%となり、あまり良くなかったは2.0%と、改めてインターンシップの満足度が高いことが示された。海外インターンシップでは非常に良かったと良かったを合わせると100%となり全員が満足しているのに比べ、国内インターンシップが非常に良かったと良かったとを合わせても76.8%であり、国内インターンシップと比較して海外インターンシップの満足度が高いことが確認された。

(3) 学習の一環として無報酬で行われていることと研修内容を考え合わせた場合の満足度を教えてください。



図－4 無報酬で行われた研修の満足度

図4は、アルバイトとの比較においてインターンシップが無報酬で行われていることへの満足度を示している。全体では、「非常に満足したと満足した」を合わせると64.3%となり、一定の評価が示されている。アルバイトとの違いについて「インターンシップでは責任ある仕事が任され向上心が沸いた」という声があった。国内インターンシップでは、「あまり満足できなかった」が17.9%おり、その主な理由としては「アルバイトと仕事内容が同じ」、「多忙なのに無報酬」だった。また、国内インターンシップでは、「非常に満足した」と「満足した」を合わせても44.6%と過半数に届かなかったのに対して、海外インターンシップは2倍の90.5%と殆んどが満足している。この調査結果に示されているように、本学が実施する海外インターンシップが、事前に受入れ企業と研修内容などを確認した上で実施しており、アルバイトに類する安価な労働力の提供とは内容が相違していること、宿泊施設などの環境が快適で安全である上、比較的少ない費用負担で参加できることなどが満足度を高めている要因であると考えている。

(4) インターンシップの期間はどのくらいが良いと思いますか。

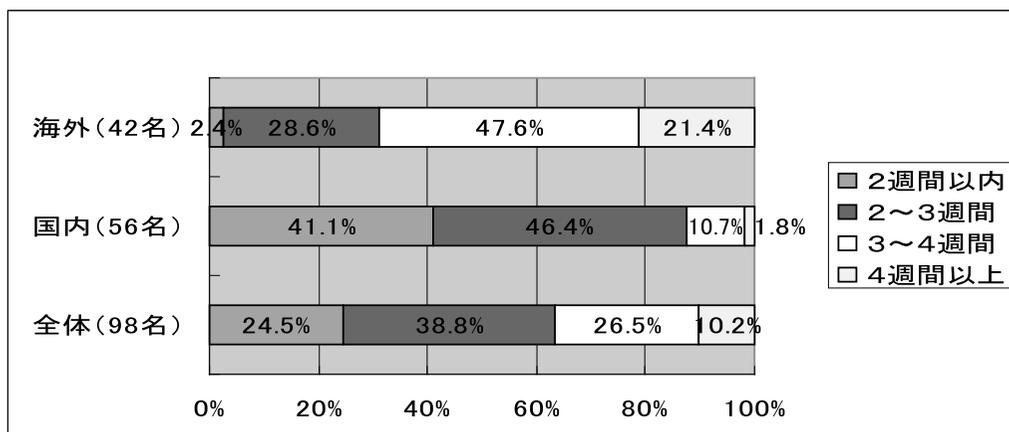


図-5 インターンシップはどれくらいの期間がよいか

図5は、インターンシップ期間がどのくらいが良いかへの回答を示している。海外インターンシップの参加者は、3週間以上が69%で比較的長期間が相応しいと回答しているが、逆に国内のインターンシップ参加者の87.5%が3週間以内が相応しいと回答している。国内で実施されているインターンシップの期間（文部科学省平成19年度調査）が、1～2週間が約5割、3週間未満を含めると約9割近くになるわが国の実態の数値とほぼ合致した回答となった。

(5) 研修後の学生生活の中で、新たな目標ができましたか。

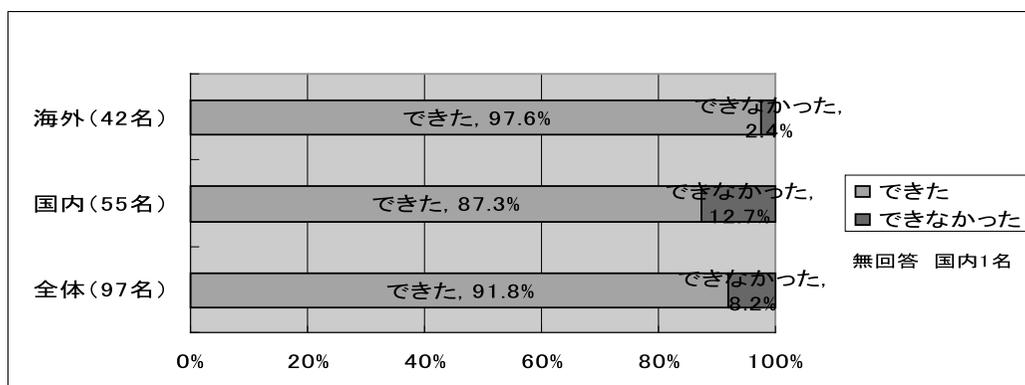


図-6 新たな目標ができたと思うか

図6は、大学に戻ってからの目標ができたかの回答を示している。国内インターンシップの参加者は87.3%であるが、海外インターンシップの参加者では97.6%と殆んど全ての学生が新たな目標ができたと回答している。インターンシップに参加した学生は、「社会に出てからの仕事や仕事に必要な知識は何か」「自分には何が足りないか、学生生活で何を身につける必要があるか」を確認することにより、その後の学生生活の過ごし方を考える機会となっている。また、明確な目標が持て、向上心が湧いて前向きな学生生活を送れるようになる。

(6) インターンシップを体験したことで進路選択に影響すると思いますか。

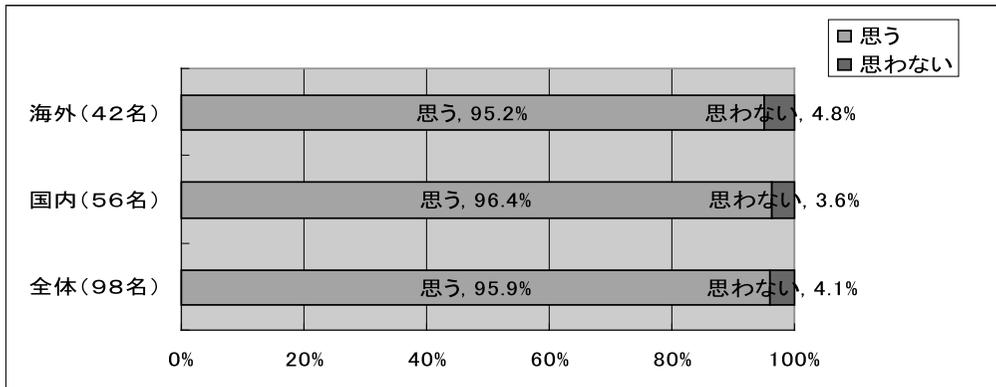


図-7 進路選択に影響すると思うか

図7は、進路選択への影響があったかへの回答を示している。進路選択に影響すると回答した学生が95.9%もあり、国内海外問わず高い比率であったことが興味深い。インターンシップに参加して働くとはどういうことかを実感したからではないかと考える。学生の感想には、「先輩から仕事の話聞いて持っていたイメージと違った」「自己分析ができた」「今まで関心なかった仕事に興味を沸き、進路選択の幅が広がった」などの声もあった。特に海外インターンシップに参加した学生に、「海外で働いてみたいという気持ちが強くなった」との声が多かったのは、やり遂げたことが少し海外で働くことに対する自信に繋がったのではないだろうか。

(7) インターンシップに参加して自分の当初の目的は達成できましたか。

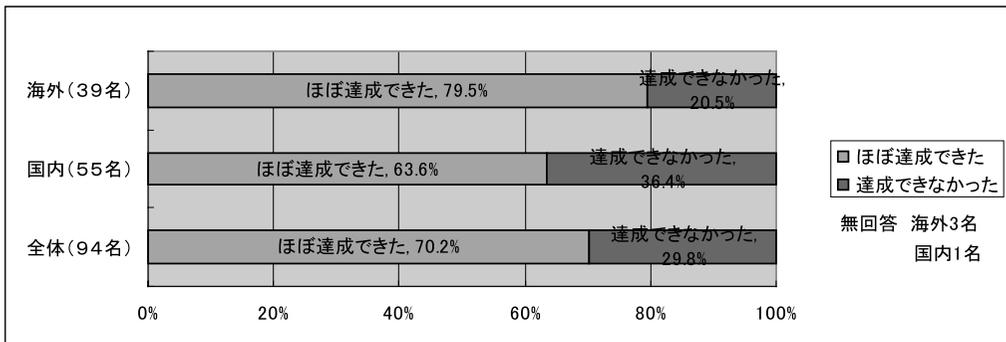


図-8 インターンシップに参加した当初の目的は達成できたか

図8は、目標が達成できたかを示している。達成できたと回答したのは、海外インターンシップに参加した学生が79.5%であったのに対して、国内インターンシップに参加した学生は63.6%であった。目標達成にどのような努力・工夫したかの質問に、海外インターンシップでは、殆どどの学生が「自分から積極的に挨拶したり話しかける努力をした」と回答している。また、言葉が通じなくても「相手を思いやる気持ちが大切」との回答もあった。国内インター

ンシップでは、「分からないことは質問したり、メモをとるようにした」との回答が多かった。

(8) インターンシップに参加したいと思ったのは、いつからですか。

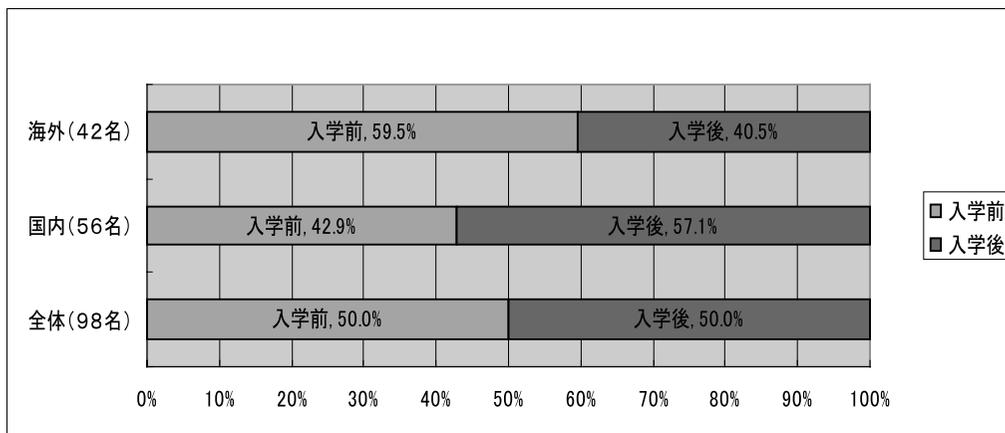


図-9 インターンシップに参加したいと思ったのはいつか

図9は、インターンシップに参加したいと思った時期について示している。インターンシップに参加した学生の中で、入学前から参加したいと思っていた学生は半数の50%であった。海外インターンシップ参加者についてみると59.5%とやや関心が高かったことがわかる。インターンシップ参加者への調査ではあるものの、インターンシップが高校生にとって関心が高い大学の教育プログラムとなっていることが確認できた。

(9) 本学に入学した目的にインターンシップへの興味は含まれていましたか。

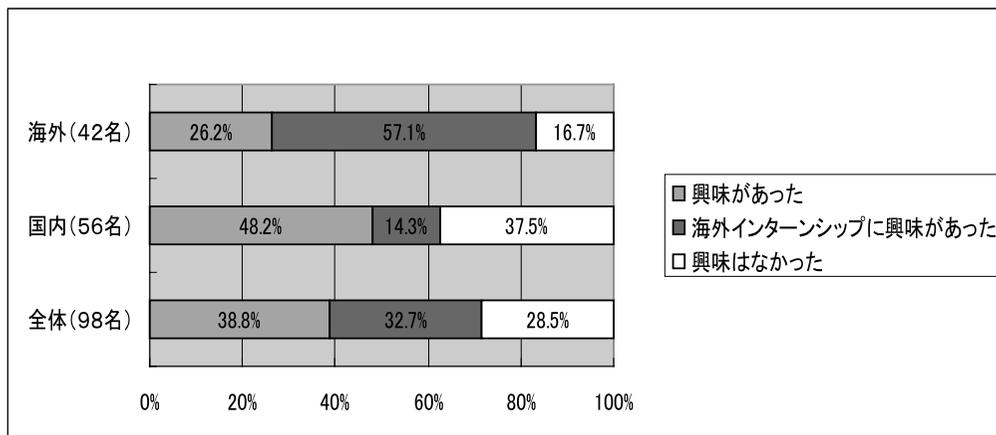


図-10 入学の目的にインターンシップへの興味は含まれていたか

図10は、本学に入学した目的にインターンシップへの興味が含まれていたかへの回答を示している。「興味があった、特に海外インターンシップに興味があった」という回答を合わせると71.5%となり、インターンシップ参加学生が対象であることを踏まえても、高校生にも関

心が広がり、大学選びの理由の1つになっていることが確認された。

(10) ビジネスマナー接客の基本5項目

[質問票 資料1]

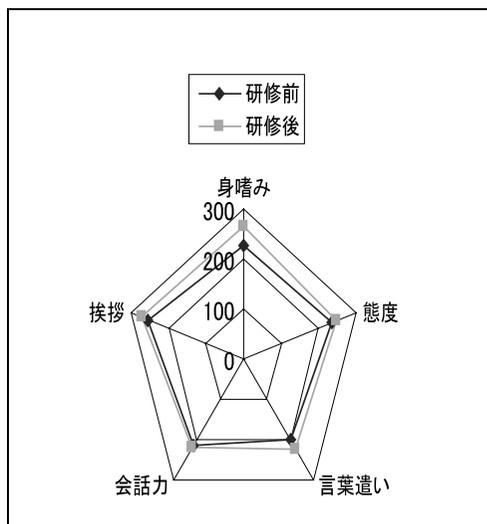
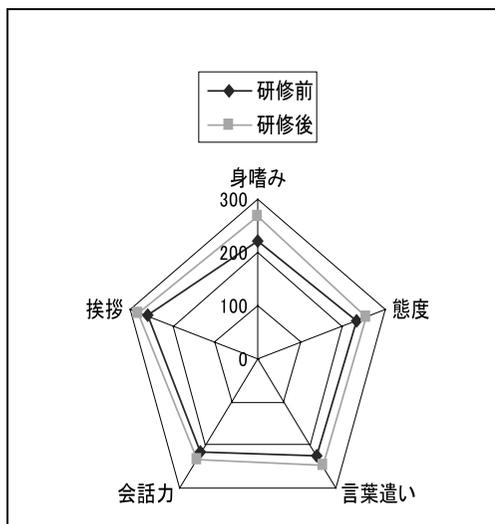


図-11-1 接客の基本5項目（海外）

図-11-2 接客の基本5項目（国内）

※インターンシップ研修の前と後での各項目についての行動・意識の変化についての自己評価を、よく出来る 300・ふつう 200・出来ていない 100、として表示した。

表2 ビジネスマナー接客の基本5項目

研修地/項目	調査時期	身だしなみ	態度	言葉遣い	会話力	挨拶
海外インターンシップ	研修前	220	231	226	220	259
	研修後	269	253	248	233	281
国内インターンシップ	研修前	227	233	200	215	256
	研修後	264	245	221	219	268

※行動レベル a（よく出来る）・b（ふつう）・c（出来ていない）の人数の分布（比率）に対して、abcを、それぞれ3点、2点、1点として、その乗じた合計点を各項目別に表示した。

図11/表2は、ビジネスマナー接客の基本5項目について、インターンシップ研修に参加する直前と参加後の自己採点の結果を示している。国内インターンシップ、海外インターンシップとも参加後は総じて、「身だしなみ、態度、言葉遣い、会話力、挨拶」の5項目全てにおいて自己採点のレベルが上昇している。特に海外インターンシップの参加者は5項目全てにおいて国内インターンシップの参加者のレベルを大きく上回っていることが確認された。

基本5項目の内、特に「身だしなみ」についての自己採点レベルの上昇度が大きかった。こ

これは実際に働いてみて、「身だしなみ」が人の印象を左右することに気付き、多くの学生が常に意識して気を付けるようになったことの意味ではないかと考える。自己採点のレベルが全項目の中で一番高かったのは「挨拶」であり、「挨拶」についてはインターンシップに参加した大多数の学生が「よくできている」と自己採点している。図8にもあるように、コミュニケーションをとるために「誰に対しても、自分から先に挨拶することを心がけた」ことが、身に付いたと思うようになったことに繋がったと考えられる。ついで、「言葉遣い」と「態度」の項目も上昇しているが、これらは社会人としてのコミュニケーションを図って行く上で、TPOに合わせて正しい言葉遣いと話し方、そして態度が大切であることに「気付く」ことができた成果であると考えられる。

#### (11) その他の質問項目

①インターンシップ中、最も勉強になったこと、やりがいを感じたこと、感動したことはどんなことですか。

この質問には、「有り難う、THANK YOU, 謝辞」といわれた時に遣り甲斐と仕事をする楽しさを感じた」「英語を使う機会が多く、英語でのコミュニケーションが取れたときに嬉しさと遣り甲斐を感じた」「仕事を通して文化の違いを学べた」「異文化にふれ視野が広がった」

「相手が何を望んでいるのか、相手の気持ちに立って、接客やサービスを工夫することの必要性に気付いた」との回答があった。

②インターンシップ中、困ったこと（研修内容、宿泊施設、通勤、食事等）、あるいは改善したほうが良いと思われることは何ですか。

この質問には、「特に無い」との回答が多かったが、「食事の問題」や「生活に必要な物などについて事前にもっと教えて欲しかった」との声があった。

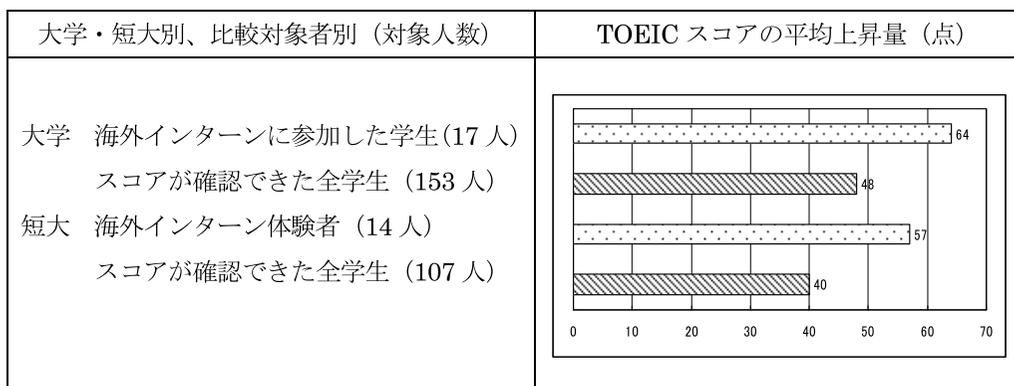
③インターンシップの経験を、今後どのように活かしていきたいと思いませんか。

この質問には、「就職活動で活かしたい」と回答した学生が圧倒的に多く、ついで「語学力の無さを実感、もっと語学を勉強したい」と回答した学生が続いた。

### 3-2. 調査方法 [TOEIC]

2009年夏期休暇の前と後にTOEICテストを受験した学生について、海外インターンシップに参加した学生と参加していない学生を対象にTOEICスコアの上昇量を比較分析した。海外インターンシップ参加者は2007年度に入学した外国語学部学生及び2009年度に入学した短期大学の学生である。文京語学教育研究センターが保有するTOEICデータを基に、外国語学部は3年前期、短期大学は1年前期のTOEICスコアと2009年夏期海外インターンシップ終了後のTOEICスコア（複数回受験した場合はスコアの高い方を採用）について、TOEICを受験してスコアが確認できた学生を対象として分析した。

### 3-2. 分析結果 [TOEIC]



図－12 TOEIC スコアの平均上昇量（点）

外国語学部及び短期大学双方について、海外インターンシップに参加した学生の TOEIC スコアの上昇量がスコアを確認できた全学生の TOEIC スコア上昇量の平均を上回っていることが確認された。外国語学部及び短期大学の学生で TOEIC スコアが把握できた学生の平均上昇量が、それぞれ 40 点、48 点であるの対して、海外インターンシップに参加した学生の TOEIC スコアの平均上昇量は、それぞれ 57 点、64 点であった。表 1 に示されているように、海外インターンシップに参加した学生の参加目的に「語学力を向上させたい」が多かったことから、海外インターンシップへの参加が TOEIC スコアの上昇に繋がっていると考えられる。今回の調査では短大生の 255 点が最大の上昇量であった。

## 4. 考察

### 4-1. 分析結果のまとめ

第一にインターンシップが大学や短大の講義では学べないことを体験する機会となり、有意義で満足度が大変高いことが明らかとなった。特に大学が教育目的として実施する海外インターンシップに参加した学生の大多数が満足している。企業がインターンシップとして学生を受入れる目的は、①人材育成という社会的な責任と広報活動（PR）、②優秀な人材を見極めるための採用活動の一環、③繁忙期におけるアルバイトに類する安価な労働力確保、の3つに分類される。勿論、国内で実施されているインターンシップでは意義・効果の面で優れたものも多いが、一部に繁忙期におけるアルバイトに類する安価な労働力として実施されているものがあり、それが満足度を低下させる結果となっているのは残念なことである。

今後はインターンシップへの取り組みに際して、受入れ先の数を確保することを優先する「質より量」を求めるのではなく、研修内容を事前に確認することが求められる。それに対して、海外インターンシップの多くは受入れ先の責任者が人材育成を強く意識して研修プログラムを作成、指導にあたっているのが高い満足度となって表れている。また、学ぶことが多くあ

るといっても国内インターンシップよりも海外インターンシップが長い期間を望まれる理由ではないだろうか。

第二に、目的意識が希薄で学力が不足する学生が増えているなかで、インターンシップに参加した殆どどの学生が新たな目標を見つけ、参加したことが進路選択に影響すると回答している。多くの学生からインターンシップに参加して「やりたいことが見つかり、就活での課題がわかった」との声が聞かれた。そのことから、自分の職業適性を確かめ、今の自分に足りないものは何か、学生生活で何を身につける必要があるか、などを考える機会になったと確信する。インターンシップは、「企業が求める人材」をまさに学生に伝える機会でもある。大学生活に戻って必要な実力を身に付ける努力をすることを期待したい。そして、大多数の学生がインターンシップという実践的な体験をやり遂げ、その自信と意欲を今後の就職活動に活かしたいと考えている。実際に仕事を体験することで知識が少ないことから起きる就職後のミスマッチやニート、フリーターといった若年者の雇用問題の防止に繋がることを期待したい。第三に、学生はインターンシップを主に就業体験、業界研究の場として考えているが、海外インターンシップに参加した学生の最大の目的は「語学力の向上」であり、そのためにインターンシップ期間中は「自分から積極的に挨拶したり、話しかける」努力を行っている。海外での語学研修を体験したことがある学生達は、単なる語学研修の時より海外インターンシップのほうが英語を話す機会が多いと話している。「何のために語学を学ぶのか」をまさに実感できたことで、学習意欲が湧き TOEIC スコアの上昇に繋がったことが確認できた。本学の外国語学部及び短大は、語学運用力を高めることを目指しており、海外インターンシップは、まさに“学ぶだけの語学”ではなく“使うための語学”を身につける実践的な教育プログラムとなっている。TOEIC スコアの上昇量については、学年が上がるにつれて上昇量が緩やかに下降する傾向となり、3年の後期から4年にかけてはマイナスになることもある(竹蓋・与那覇 2006a)。これについては、受験者数など調査の仕方や学習時間など様々な要因が関係すると思われるが、一般的に学年が低いほど TOEIC スコアの上昇量が大きいといわれている。インターンシップへの参加が学習の動機付けとなり、単にインターンシップの期間中だけではなく、その後の学生生活での学習意欲を高めることにも繋がることから、低学年でのインターンシップへの参加が望ましいと考える。また、「現地の人から日本のことを聞かれ、改めて日本の歴史や文化を学ぶ必要性を感じた」という学生もおり、生涯学習の切っ掛けにもなっている。

第四は、入学前からインターンシップに関心を持ち、インターンシップを大学選びの要素の1つと考えている高校生がかなりいることが明らかとなった。外国語を学びたいという学生にとって、満足度が高い海外インターンシップは留学制度と同様に大学の魅力となり得るだろう。

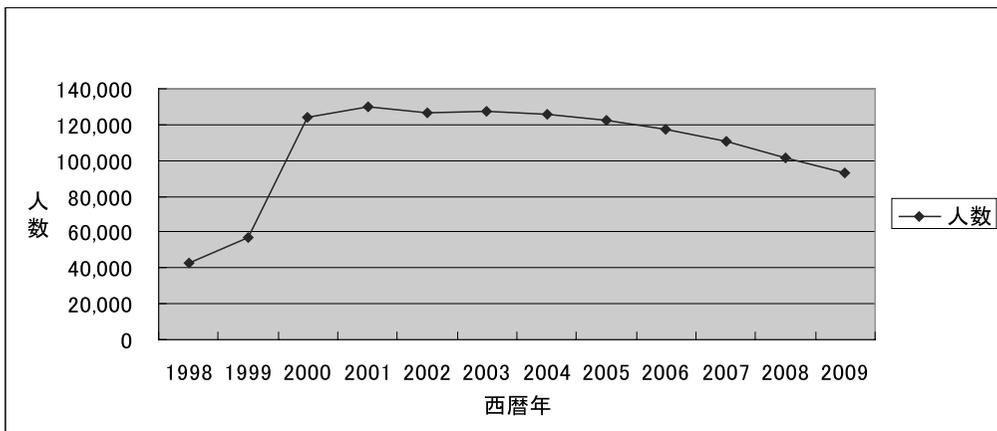
第五は、インターンシップに参加した後は、ビジネスマナー接客の基本がより身に付いたという学生が多いが、特に海外インターンシップに参加した学生のほうが国内インターンシップに参加した学生より自己効力感を高めていることが確認された。最近では、家庭で基本的な生活習慣が形成されていない学生が増えていると言われているが、インターンシップに参加したこ

とで、言い換えれば基本的な生活習慣が向上したともいえる。社会に出る前に身につけておくべきものであるが、大学の教育だけでは難しいというのが現状である。上場企業など多くの企業は新卒採用に際して、理系とは違い文系の大学や短大の学生に対して必ずしも即戦力を求めているわけではない。入社後に教育研修や能力開発など社員を育てるシステムが整っているからである。しかし、採用面接では基本的な生活習慣が形成されているかどうかが見られている。

#### 4.2. 改めて、今なぜ海外インターンシップか

近年、わが国の企業の海外売上高は着実に拡大しており、海外駐在員の数も増加している。それは、わが国の企業が海外を生産拠点としてだけでなく、成長が見込めるマーケットとして積極的に進出するようになってきているからだ。しかし、わが国の若者は海外で学んだり、働いたりすることに消極的になっている。日本から海外に留学する学生数は2002年以降減少しており、海外旅行に出かける20代の若者の出国率が下落し、その絶対数は減少傾向にある。また、企業の新入社員への調査でも、海外で働きたいと思わない新入社員が2人に1人いるという結果がでている。このような若者の海外離れの要因としては、経済的な要因も大きいですが、早期化している就職活動に膨大な時間を費やさざるを得ないということもあるのではないだろうか。海外経験が乏しいことにより、外国語でのコミュニケーション能力や異文化適応能力への不安が若者の内向き志向に繋がっているのではないだろうか。

激化している国際競争の中で、アジアにおいては中国・韓国などの企業が急速に台頭しているのとは反対にわが国の企業は存在感が低下しつつある。このような中で、日本の将来を担う国際的に活躍する人材を育成するために海外インターンシップは大きな役割を果たすと考える。筆者は航空会社の人事部に在籍していた時に大学と連携して多数の学生を海外支店や空港事業所などに受入れたが、学生は目的意識を持ち、自分のキャリア形成に積極的に取り組んでいた。



図－13 日本人留学生数の推移

※留学生数とワーキングホリデービザの年間発給数、ビザが不要な短期留学者数は含まれない。  
出所) 出入国管理統計年報(法務省)、(株)トゥモロー2010資料より作成。

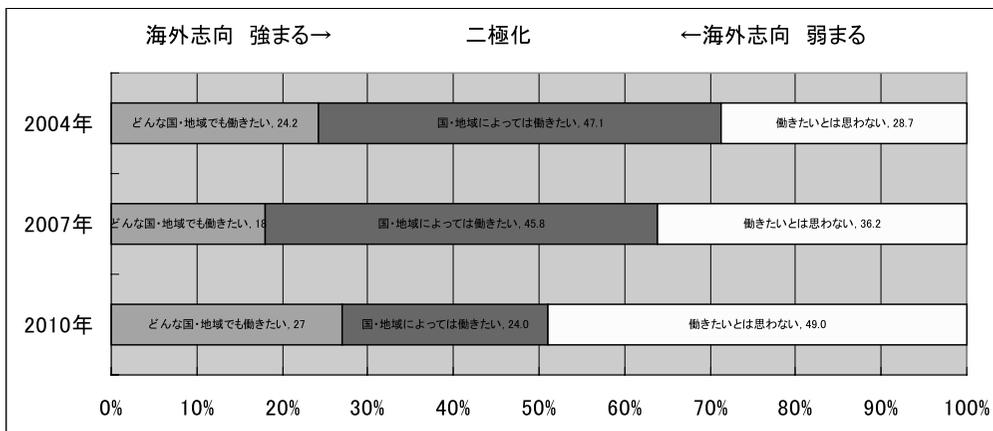


図-14 海外勤務への志向

出所) 産業能率大学資料

## 5. 最後に

海外インターンシップは、就業意識への影響や自己効力感、そして語学教育において大きな意義・効果があることが確認され、国際社会で通用するコミュニケーション能力を身に付けられる優れた教育プログラムであるとの結論に至った。野口・吉川（2008）も、「インターンシップ履修者はその成長が顕著であるが、中でも海外インターンシップ参加者の成長は際立っている」と述べ、大学の講義とは違った有効な教育手法であると評価している。

人口が減少し、経済の低迷が続く日本の外には急成長するアジアがあり、競争が激化する中で、国際的に活躍する人材の育成が不可欠となっている。文部科学省は2011年度から大学や短大の教育課程に職業指導（キャリアガイダンス）の実施を義務付けたが、その具体的な内容は各大学や短大に委ねられている。大学は、今後一層社会とのかかわりを持ちながら、世界の潮流の変化とニーズに対応する人材育成が求められている。今、政府の新成長戦略<sup>4)</sup>や経済産業省のグローバル人材育成委員会<sup>5)</sup>の方針において、学生が海外で学習・就労できる海外インターンシップ制度の充実に乗り出そうとしていることに大いに期待したい。

これから、海外インターンシップに対する関心や期待がますます高まることが予想される。今後の課題としては、産官学による海外インターンシップ推進の為に組織の設置を検討し、日系企業の海外現地法人などの受入れ企業を開拓して、学生が早い時期に海外インターンシップに参加して海外経験を積み、自分の適性や仕事を考える機会を持ち、学業に励むことができるように支援することである。

筆者のインターンシップについての研究はまだ日も浅く、本稿は限られた期間に得られたデータに基づく中間取り纏めのようなものであるが、今後さらにデータを蓄積して海外インターンシップの発展に寄与すべく研究を深めたい。

## 注

- 1) 本稿では、日本の大学・短大で学ぶ学生が海外で就業体験をすることを「海外インターンシップ」と呼び、外国人学生が日本で就業体験する「国際インターンシップ」と区別する。
- 2) 日本経営者団体連盟のこと。
- 3) OJT（on-the-job-Training）企業内教育訓練。
- 4) 新成長戦略（平成 22 年 6 月 18 日閣議決定）  
「世界と日本を支える人材を生み出す高等教育」の主な施策として、日本人学生等の海外交流促進、国際化対応ビジネス人材の育成。その他、大学のインターンシップ実施率の目標を 100%とする。
- 5) 経済産業省「産学人材育成委員会パートナーシップ、グローバル人材育成委員会」（2010 年 4 月）は、「海外インターンシップが外国語でのコミュニケーション能力を高め、グローバル人材の育成に有効であり、グローバルビジネスを現場で体感することは更に効果が高い」として、産学官による「海外インターンシップ・プログラムの提供と企業による海外インターンシップ受入れ支援」を提言している。

## 参考文献

- \* 文部省（1998）『インターンシップ・ガイドブック』
- \* 日本経済団体連合会（2001）「エンプロイヤビリティ形成・向上のための産学連携教育の推進」
- \* 吉本圭一（2006）「インターンシップ制度の多様な展開とインターンシップ研究」  
『日本インターンシップ学会年報』第 9 号 18-19
- \* 竹蓋幸生・与那覇信恵（2006）「英語教育カリキュラムの中の評価、その方法と問題点」『文京語学教育センター活動報告』2008 年 1 月 p48
- \* 田中宣秀（2007）「高等教育機関におけるインターンシップの教育効果に関する一考察」  
『日本インターンシップ学会年報』第 10 号
- \* 野口 徹・吉川孝三（2008）「工学系大学院における海外インターンシップ教育の展開」  
『日本インターンシップ学会年報』第 11 号 28
- \* 『インターンシップの手引き』文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学
- \* 林寛美（2010）「文京学院短期大学のキャリア形成支援と就業力向上支援について」『大学と学生』

（2010.10.26 受稿，2010.11.22 受理）

ビジネスマナー接客の基本5項目 (質問票)

資料1

下記の現在のレベル欄に、レベル目安を参考にa (よく出来る) b (ふつう) c (出来ていない) のどれかに○を印して下さい。

接客の基本 (5項目)	レベル目安 a	レベル目安 c	現在のレベル
<p><b>身だしなみ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●清潔感があり、TPOを考えた服装で美しく着こなしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○身だしなみが控えめで品を感じさせる</li> <li>○エチケットをまもり好感を感じさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○身だしなみをあまり気にしない。</li> <li>○TPOはあまり考えない。</li> </ul>	a <u>  </u> b <u>  </u> c <u>  </u>
<p><b>態度</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●誠実な印象を与える所作が身についている。</li> <li>●物腰がやわらかい。</li> <li>●立ち姿は背筋を伸ばした姿勢を保っている。</li> <li>●公共の場所では、周りを意識して言動に気をつけている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○礼儀と節度をわきまえた所作、態度を心がけている。</li> <li>○公共の場では常に見られているという意識をもっている。</li> <li>○適度な緊張感を持っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○礼儀と節度を欠いた所作、態度をとっていることがある。</li> <li>○緊張感に欠けた印象を与えることがある。</li> <li>○配慮を欠いた態度言動がある。</li> </ul>	a <u>  </u> b <u>  </u> c <u>  </u>
<p><b>言葉遣い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●相手に合わせ、正しい言葉遣い (丁寧語/尊敬語/謙讓語) をしている。</li> <li>●分かりやすい話し方 (学生用語/流行語などは使用せず) である。</li> <li>●話すときは、正しい語尾の長さ、発音、声のトーン、口調である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○常に正しい言葉遣いと話し方ができる。</li> <li>○状況に応じた言葉遣いができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○言葉遣いが正しくないことがある。</li> <li>○話し方に誠実さや親しみにかけることがある。</li> </ul>	a <u>  </u> b <u>  </u> c <u>  </u>
<p><b>会話力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●依頼時は、クッション言葉や感謝の言葉を添えている。</li> <li>●話す内容は整理されていて、分かりやすい表現ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○感謝、敬意、謝罪の気持ちを、口調、表情、態度で示している。</li> <li>○話す内容は常に要点を得ている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分のペースで話をすすめる。</li> <li>○話の内容にまとまりがないことがある。</li> <li>○自分から話かけることは少ない。</li> </ul>	a <u>  </u> b <u>  </u> c <u>  </u>
<p><b>挨拶</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●いつでも、自分から明るい笑顔と明るい声で挨拶を行っている。</li> <li>●「感謝」「歓迎」の気持ちを相手に伝わるよう心がけている。</li> <li>●お辞儀は状況に応じた望ましい形ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いつでも、どこでも、誰にでも、自ら先に明るい笑顔と明るい声のトーンで挨拶を実践している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分から挨拶をしないことがある。</li> <li>○挨拶時、明るい笑顔や明るい声のトーンに欠けることがある。</li> <li>○状況に応じた正しいお辞儀ができていない。</li> </ul>	a <u>  </u> b <u>  </u> c <u>  </u>

出所：日本航空資料より作成